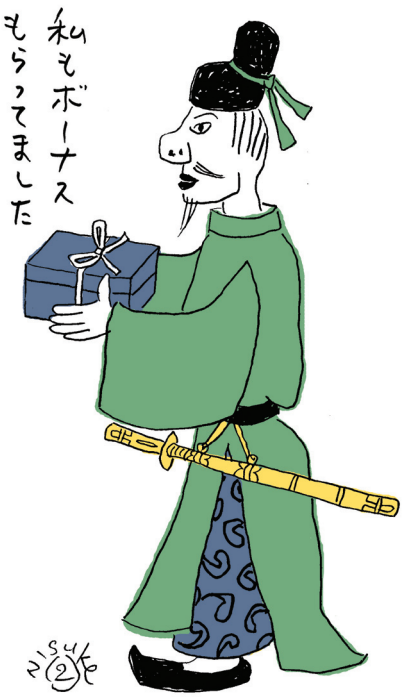
起源探訪

VOL. 05

ボーナス

三菱の岩崎弥太郎が支給したボーナスの訳とは



日本企業では一般に、夏と冬の年に２回、ボーナスが支給される。その由来は江戸商家の「お仕着せ」にあるとも言われているが、奈良時代の官僚にも、春と秋の年２回、季禄という名のボーナスが支給されていた。季禄は位階ごとにその量が決まっていたため、昇進が早まると季禄の支給量が増え、国家財政を圧迫した。そのため、国はわざわざ位階を増やし、昇進を遅らせる措置までとっていたのだ。

そんなボーナスが、民間企業でも支給されるようになったのは明治時代のこと。1876（明治９）年12月に、三菱の岩崎弥太郎が支給した「歳末手当」がその先駆けだと言われている。

台湾出兵への政府協力で日本の一大海運会社にのし上がった三菱は、のっけから海外企業との激しい競争に晒されていた。最初の相手は、米パシフィック・メール汽船会社である。日本と上海を結ぶ定期航路を独占していた同社は、横浜・長崎間の上等運賃30円を８円まで値下げするなどして三菱を駆逐しようとした。三菱は政府からの支援を頼りにこれに対抗。結果、パシフィック・メール汽船会社は上海航路から撤退し、三菱はその権益を掌中に収めることになった。だが、競争はこれで終わりではなかった。さらに強力な英P.O.汽船会社が新たな航路を設け、進出してきたからだ。

運賃引き下げ競争は再び熾烈を極め、岩崎は社内に大規模な合理化を宣言する。具体的には自身の給与を半減するとともに、勤務態度の良くなかった従業員16名を解雇した。従業員数約1700人という規模を考えれば、解雇はそれほど多くない。重役にあたる幹部のうち、借金を重ね続ける会社の前途に嫌気がさし、自ら退社したものが１名。残る重役は、自ら給与の減額を申し出るなどして岩崎にならった。

三菱は結局、この戦いにも勝利した。本社従業員に初めてボーナスが支給されたのは、P.O.社を撤退させた年の暮れ。金額は月給の半分程度だった。

米国では一時、政府支援を受けた保険会社の高額ボーナスが話題になった。「有能な社員を引き留めるために」高額なボーナスを支給するのが米国流なら、「みんなで頑張ったご褒美」に利益を分け合うのが、日本流ボーナスの起源。さて、みなさんの会社はどちらの考え方に近いだろうか。

Text = 曲沼美恵

フリーライター。1970年生まれ。福島大学教育学部卒業。日本経済新聞社を経て、現在に至る。著書『ニート――フリーターでもなく失業者でもなく』（玄田有史氏との共著、幻冬舎）

Illustration = 下谷二助

参考文献

三菱グループのポータルサイトにある三菱人物伝「岩崎彌太郎物語」http://www.mitsubishi.com/j/index.html、『実業の詩人　岩崎弥太郎――三菱をつくった男』（嶋岡晨著、名著刊行会）、『三菱財閥史　明治編』（三島康雄著、教育社）、『日本的雇用慣行――全体像構築の試み』（野村正實著、ミネルヴァ書房）